

## 中学生の仲間集団の排他性に関する研究（2）

—教師を対象にしたシナリオ実験—

有 倉 巳 幸〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕  
中 野 秀 敏〔佐賀市立金立小学校〕

### The study of peer group exclusivity in junior high school students (2)

： The experiment using scenarios for teachers

YUKURA Miyuki・NAKANO Hidetoshi

キーワード：排他性規範、排他性欲求、中学生の仲間集団、適応感、教師

#### 【問題・目的】

本研究では、有倉（2012）と同様のシナリオを用いて、中学生の排他的な仲間集団を教師がどのようにとらえているかを測定し、生徒との違いを比較検討することを目的とする。

いじめや不登校は、教師にとって理解と対応が難しい課題である。こうした課題に対して、学校現場としては、態度や性格、能力といった当事者の傾性（proposition）に原因を求める傾向にある。心理学では、基本的帰属錯誤（fundamental attribution error）と言われ、当事者の行動を引き起こしたであろう外的な状況要因の影響を過小評価し、その当事者の内的要因（態度や性格など）の影響を過大評価する傾向のことをいう（Ross, 1977）。そのため、親や教師は、当事者の態度や性格などが改まれば、問題は解決の方向に向かうと信じ、矯正的な関わりを取ってしまう場合も少なくない。

このうち、いじめは、先行研究の知見の中で、被害者と加害者のそれぞれの傾性の問題と理解するのではなく、彼らの周囲にいる聴衆や傍観者の存在とともに理解すべきだといういじめの4層構造理論（森田, 1985）にあるように、いじめを取り巻く人間関係や集団に注目していくことが必要であろう。従って、学校現場でいじめが起こる友人関係や仲間集団の特徴や様相、そのダイナミズムを明らかにすることは、いじめの解決において一助となりうるであろう。

有倉（2012）は、中学生を対象に架空のシナリオを読んで、どのように考えたかを尋ねる形式で

回答を求めた。具体的には、シナリオによって排他性欲求および排他性規範の強さを操作し、学級や自身の所属する集団への適応感、いじめや集団内地位などに関する評価に及ぼす影響を検討することを用いた。

その結果、排他性欲求や排他性規範の強さは学級適応感を低めていることや、排他性規範の強い仲間集団に所属している場合、排他性欲求の弱い生徒は、排他性欲求の高い生徒よりも自集団適応感が低いことが明らかとなった。

また、排他性規範の強い集団は、弱い集団より逸脱したメンバーに対する仲間はずれや無視、暴力といった制裁としてのいじめが起りやすく、強い権力をもったリーダーがいると、生徒たちは判断していた。さらには、排他性規範の強い集団は、弱い集団より反対意見を言えない雰囲気があると生徒が判断していることも明らかとなった。

生徒のこうした認知に関する知見によって少なからず、思春期以降にみられる排他的な仲間集団内にいる生徒の状況が明らかとなり、いじめをはじめとする学校内外の諸問題の理解を促す一助となり得るであろう。

ところで、思春期以降の仲間集団は、尊敬や信頼といった内潜在的な（covert）性質によって結びつくことから、近接性や愛着といった外顕的な（overt）性質で結びつく児童期初期の仲間集団と比べ、教師など外部からの観察による理解が困難になる。なぜならば、思春期以降の仲間集団は、集団外部から観察している様子と集団内部の状況が必ずしも一致していないからである。一

見、仲間集団で仲良く会話をしている様子が窺えても、その集団内で地位の差から苦しんでいるかもしれない。

こうした点を考慮すると、思春期以降の仲間集団に対して、集団内部及び集団外部の両方から観察可能な生徒と、集団外部から観察している教師とのズレを検討することは、上記の生徒指導上の課題に何らかの手がかりを提供できるかもしれない。

生徒の仲間集団を理解する際のズレを検討する場合、教師と生徒では、もっている情報に加え、視点と立場の違いを挙げることができる。

まず、生徒は、まさにその仲間集団に属しているため、仲間集団の状況や自分及び仲間の過去の行為をよく知っているが、教師は、そのような情報をもたないので、その理解においてズレが生じるであろう。

また、集団に所属している生徒と、集団外部で観察する教師では視点が異なり、同一の対象を観察していても異なった解釈がなされることが明らかになっている (e. g., 行為者－観察者バイアス; Jones & Nisbett, 1972)。そのため、仲間集団の理解において、ズレが生じることも十分考えられよう。

さらには、立場による違いも異なった解釈を引き起こす可能性がある。生徒は、まさに仲間集団に所属しており、生徒という立場から仲間集団をとらえることができよう。しかし、教師は、生徒を指導する立場にあり、その立場で生徒の仲間集団を理解してしまうかもしれない。

こうした点を考慮すると、排他的な仲間集団を教師と生徒がそれぞれどのように認知するのかを知ることは、仲間集団内で起こる諸問題を理解する上で有益であると言えよう。しかも、生徒と教師の認知のズレに注目することで、教師の側からすれば、生徒との認知のズレを小さくすることにもつながる。

そこで、本研究では教師を対象にして、二つのシナリオ実験を行い、以下に挙げる仮説を設定する。仮説は、生徒を対象にした有倉 (2012) と同じものを立てていく。一つの理由は、教師を対象とし、生徒の仲間集団の状況を描いたシナリオ実

験を行った研究が皆無であるためである。もう一つの理由は、有倉 (2012) と同様に、当事者の立場になった場合と、集団を外から観察した場合を想定して行うので、シナリオを理解する視点としては、生徒と教師同じであるからである。異なるのは、教師という立場でこのシナリオを読んで回答するという点だけである。

まず、仲間集団の排他性規範の強い状況は、弱い状況より生徒の学級適応感を低いと評価するだろう (仮説1) と考えられる。仲間集団がとる排他的な行動は、学級内の他の友人関係との関わりを弱め、そのことは学級適応感の低さに表れてくるであろう。

次に、排他性欲求の強い生徒は、弱い生徒よりも学級適応感を低く評価するだろう (仮説2) と考えられる。学級内での仲間集団といった小さな集団を志向するということは、その集団の外にある大きな学級集団という関わりへの不安の現れとみることができよう。

自集団適応感については、有倉 (2012) でも排他性規範×排他性欲求の交互作用が見られたが、本研究でも同様の結果が見られるであろう。つまり、排他性規範の高い集団に所属している場合に、排他性欲求の弱い生徒は、排他性欲求の強い生徒よりも自集団適応感が低いだろう (仮説3) と考えられる。これまでの知見どおり、本人の期待する仲間集団のあり方と、所属している集団のあり方が一致しないため、ストレスが生じ、不適応感を覚えると評価するであろう。

仲間集団やその行動に対する認知についても有倉 (2012) と同様に測定する。まず、排他性規範の強い集団は、弱い集団より、逸脱したメンバーに対する仲間はずれや無視、暴力といった制裁としてのいじめが起りやすいと理解するだろう (仮説4) と考えられる。また、排他性規範の強い集団は、低い集団より、強い権力をもったリーダーがおり (仮説5)、反対意見を言えない雰囲気がある (仮説6) とそれぞれ評価するだろう。

なお、これらの仮説を検証するために、実験1では、教師はそれぞれ自分の同性の仲間集団を想定してもらった。つまり、男性教員は男子の仲間集団を、女性教員は女子の仲間集団を想定してシ

ナリオを読んでもらった。また、実験2では、男性教員、女性教員とも女子の仲間集団を想定してもらった。

## 実験1

### 【方法】

#### 調査対象者と調査時期

鹿児島県内の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教師173名を対象とした。性別は、男性64名（37%）、女性109名（63%）であった。年齢別では、男性教員は20代12名、30代37名、40代10名、50代以上4名、無記2名であり、女性教員は、20代22名、30代43名、40代29名、50代以上14名であった。校種別では、男性教員は、小学校10名、中学校34名、高等学校19名、無記2名であり、女性教員は、小学校48名、中学校38名、高等学校12名、特別支援学校5名、無記4名であった。なお、調査時期は、2008年8月～10月であった。

#### 実験計画

排他性欲求（強・弱）×排他性規範（強・弱）によって四つのシナリオを作成し、性別を要因に加えた3要因計画（いずれも被験者間要因）で実施した。

#### シナリオ

有倉（2012）と同じであるが、シナリオの冒頭に、「以下の文章は、中学生の友人グループについてです。自分と同性のグループを想定してください。あなたが男性ならば男子グループを、女性ならば女子グループを想定してください。」と記した。

#### 従属変数

フェイスシートで、年齢、性別、教師経験年数（臨時採用経験年数も含む）、学校種（小学校・中学校・高等学校・特別支援学校）を尋ねた。

質問項目は、有倉（2012）とほぼ同じであるが、生起感情とひとりぼっち回避規範尺度は測定しなかった。学級内の友人関係への適応感（以下、学級適応感）6項目、自集団適応感6項目、集団内地位やいじめなどに対する認知13項目（ただし、生徒と違って教師は仲間集団内部の状況を

外からでは判断しにくいことが予想されたので、有倉（2012）とは一部項目を改編した）、シナリオ操作（排他性欲求、排他性規範）の有効性を評価するチェック項目各3項目、場面の想像しやすさ1項目から構成した。いずれも5件法であった。最後に調査を実施して感じたことを自由回答で求めた。

#### 手続き

調査対象者は、ランダムに配布された4種類の冊子のうちのひとつをとり、その中に書かれているシナリオを読んで、回答してもらった。回答に際しては、学級適応感、自集団適応感については登場人物の立場に立って回答を求め、いじめなどの認知については、客観的な立場に立って回答するよう求めた。なお、調査に際しては、大学の公開講座で一斉に実施した他、各学校の知人に依頼して、実施してもらった。

### 【結果】

#### 実験操作の有効性

シナリオで用いた排他性規範および排他性欲求の操作が有効であったかどうかを検査するために、操作チェック項目各3項目をそれぞれ加算し、排他性規範（強・弱）×排他性欲求（強・弱）×性（男・女）の3要因分散分析を行った。

まず、排他性規範に関する操作チェック項目であるが、排他性規範の主効果が有意であり（ $F(1, 164)=272.72, p<.001$ ）、排他性規範強群が規範弱群より排他性規範を強いと評価していた。しかし、同項目に関して、排他性欲求の主効果（ $F(1, 164)=7.40, p<.001$ ）が有意であり、排他性欲求強群が欲求弱群より排他性規範を強いと評価していた。

次に、排他性欲求に関する操作チェック項目であるが、排他性欲求の主効果が有意であり（ $F(1, 164)=275.52, p<.001$ ）、排他性欲求強群が欲求弱群より排他性欲求を強いと評価していた。しかし、こちらも同項目に関して、排他性規範の主効果（ $F(1, 164)=33.01, p<.001$ ）、性の主効果（ $F(1, 164)=7.81, p<.001$ ）が有意であり、排他性規範強群の方が、規範弱群より、女子の方が男子よりそれぞれ排他性欲求を強いと評価していた。

いずれの項目においても、構成概念としては独立していても、実験操作の独立性を十分に保証できないという問題が明らかになった。しかし、それぞれの実験操作によって生じた分散比が最も大きかったことから、ある程度実験操作が有効であったと見なし、以下の分析を行うこととした。

また、想像のしやすさについて、評価してもらったところ、排他性欲求の主効果が有意であり ( $F(1, 162)=6.29, p<.05$ )、排他性欲求強群 ( $M=4.03$ )の方が欲求弱群 ( $M=3.73$ )より想起しやすいと評価していた。また、排他性規範×性の一次の交互作用が有意であり ( $F(1, 162)=4.99, p<.05$ )、排他性規範強群において、女子 ( $M=4.23$ )の方が男子 ( $M=3.72$ )より想起しやすいと認知していた。

#### 学級適応感

排他性規範×排他性欲求×性の3要因分散分析を行った。その結果、排他性規範の主効果が有意であり ( $F(1, 164)=18.83, p<.001$ )、排他性規範強群 ( $M=3.17$ )が規範弱群 ( $M=3.52$ )より学級適応感を低く評価しており、仮説1を支持していた。また、排他性欲求の主効果が有意であり ( $F(1, 164)=96.16, p<.001$ )、排他性欲求強群 ( $M=$

2.93)が欲求弱群 ( $M=3.81$ )より学級適応感を低く評価しており、仮説2を支持していた (Figure 1)。

#### 自集団適応感

同様に、排他性規範×排他性欲求×性の3要因分散分析を行った。その結果、排他性規範×排他性欲求の一次交互作用が有意であった ( $F(1, 165)=8.08, p<.001$ )ことから、下位検定を実施したところ、排他性規範弱群において、排他性欲求の単純主効果が有意であり、欲求強群 ( $M=3.76$ )の方が欲求弱群 ( $M=4.27$ )よりも、自集団適応感が低かった。しかし、排他性規範強群においては、単純主効果は有意でなかった。この結果は、仮説3を支持していなかった。また、排他性欲求×性の一次交互作用が有意であった ( $F(1, 165)=2.08, p<.05$ )ことから、下位検定を実施したところ、排他性欲求強群において、性の単純主効果が有意であり、女子 ( $M=3.87$ )の方が男子 ( $M=3.54$ )よりも自集団適応感が高いと認知されていた。

なお、排他性規範 ( $F(1, 165)=15.04, p<.001$ )および排他性欲求の主効果 ( $F(1, 165)=4.03, p<.05$ )も有意であった (Figure 2)。

Table 1 各尺度の平均と標準偏差 (実験1)

排他性規範	強群				弱群			
	強群		弱群		強群		弱群	
排他性欲求	強群		弱群		強群		弱群	
性別	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
<i>N</i>	18	24	15	31	16	33	15	20
学級適応感	2.69 (0.52)	2.83 (0.58)	3.67 (0.59)	3.49 (0.53)	3.06 (0.68)	3.07 (0.75)	4.30 (0.68)	4.04 (0.65)
自集団適応感	3.38 (0.65)	3.92 (0.57)	3.63 (0.77)	3.50 (0.68)	3.69 (0.77)	3.83 (0.59)	4.44 (0.63)	4.10 (0.75)
因子1	4.13 (0.52)	4.31 (0.55)	4.08 (0.46)	4.02 (0.64)	2.88 (0.74)	3.27 (0.73)	2.56 (0.72)	2.94 (0.97)
因子2	2.41 (0.80)	2.43 (0.59)	2.33 (0.47)	2.15 (0.53)	3.17 (0.72)	2.94 (0.66)	3.73 (0.72)	3.02 (1.02)
因子3	3.53 (0.96)	4.43 (0.46)	4.13 (0.67)	4.27 (0.72)	3.06 (0.83)	3.53 (0.93)	2.83 (1.11)	2.83 (1.09)
因子4	3.21 (1.00)	4.24 (0.56)	3.63 (0.90)	3.56 (0.99)	3.06 (0.85)	3.42 (0.84)	2.83 (0.79)	2.78 (0.92)

Note. *N*は人数 ( )内は標準偏差である。

### 集団内地位やいじめなどに対する認知

本研究でも同様に因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行い，固有値の減衰状況から4因子を抽出した（抽出後の分散説明率63.33%）。第1因子（ $\alpha = .92$ ）は，逸脱行動の回避やいじめの起こりやすさ，反対意見の言いにくさなど，いじめ生起に関わる項目が高く負荷していたので，「いじめの起こりやすさ」と命名した。第2因子（ $\alpha = .71$ ）は，雰囲気がよくとかまとまっているとといった項目が高く負荷していたので，「集団の付き合いやすさ」と命名した。第3因子（ $\alpha = .85$ ）は，強力なリーダーの存在や上下関係の存在とといった項目が高く負荷していたので，「成員の上下関係」と命名した。第4因子（ $\alpha = .66$ ）は，いじめが起きても孤立を避けてグループにとどまるとか，いじめが起きても外部に伝わらないだろうといった項目が高く負荷したので，「いじめへのネガティブ反応」と命名した。

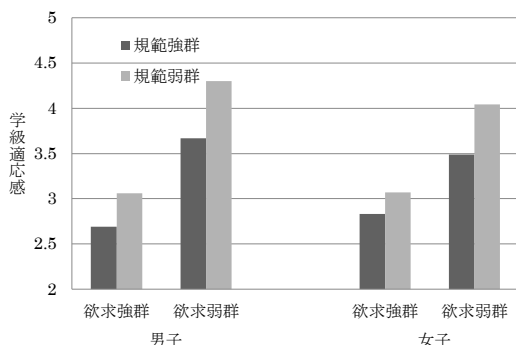


Figure 1 排他性が学級適応感に及ぼす影響（実験1）

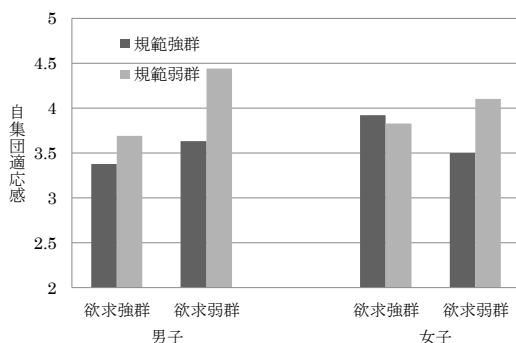


Figure 2 排他性が自集団適応感に及ぼす影響（実験1）

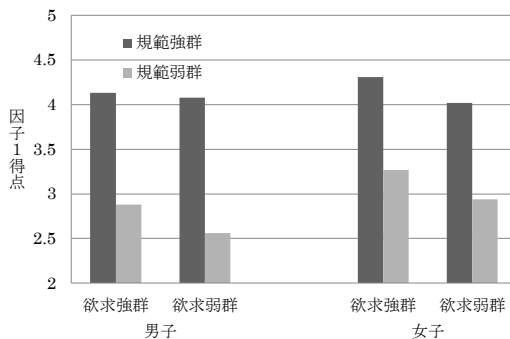


Figure 3 排他性がいじめの起こりやすさ（因子1）に及ぼす影響（実験1）

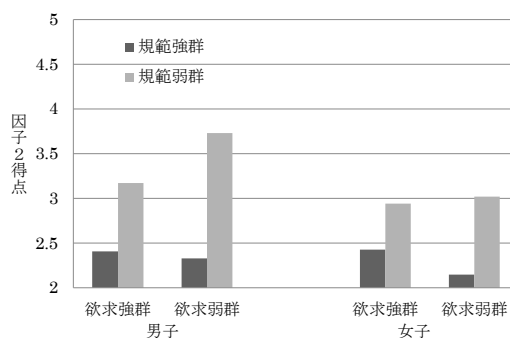


Figure 4 排他性が集団の付き合いやすさ（因子2）に及ぼす影響（実験1）

続いて，因子ごとに加算得点を算出し，排他性規範×排他性欲求×性の3要因分散分析を行った（Figure 3～Figure 6）。その結果，第1因子では，排他性規範の主効果が有意であり（ $F(1, 162) = 123.63, p < .001$ ），規範強群（ $M = 4.13$ ）の方が規範弱群（ $M = 2.99$ ）より得点が高かった。また，排他性欲求の主効果が有意であり（ $F(1, 162) = 5.07, p < .05$ ），欲求強群（ $M = 3.63$ ）の方が欲求弱群（ $M = 3.49$ ）より得点が高かった。さらに，性の主効果も有意であり，（ $F(1, 162) = 4.21, p < .05$ ），女子（ $M = 3.65$ ）の方が男子（ $M = 3.42$ ）より得点が高かった。

この結果は，仮説4，6を支持しており，排他性規範が強い集団は，弱い集団より，いじめが起こりやすく，反対意見を言いにくい雰囲気であると教師が推測していることが明らかになった。

第2因子では，排他性規範×排他性欲求の一次交互作用が有意であった（ $F(1, 162) = 5.83, p < .05$ ）。

05) ので、下位検定を行ったところ、排他性規範弱群において、排他性欲求の単純主効果が有意であり、欲求弱群 ( $M=3.37$ ) の方が欲求強群 ( $M=3.05$ ) より得点が高かった。また、排他性規範の主効果 ( $F(1, 162)=59.79, p<.001$ )、性の主効果 ( $F(1, 162)=5.83, p<.05$ ) がそれぞれ有意であり、規範弱群 ( $M=3.32$ ) より規範強群 ( $M=2.31$ ) の方が、また男子 ( $M=2.90$ ) より女子 ( $M=2.61$ ) の方が集団内のメンバーと付き合いにくいと考えていた。

第3因子では、排他性規範の主効果が有意であり ( $F(1, 162)=56.32, p<.001$ )、規範強群 ( $M=4.15$ ) の方が規範弱群 ( $M=3.15$ ) より、集団内に強力なリーダーが存在し、メンバーに上下関係が存在すると認知しており、仮説5を支持する結果であった。

また、排他性規範×排他性欲求の一次交互作用が有意であった ( $F(1, 162)=6.30, p<.05$ ) ので、下位検定を行ったところ、排他性規範弱群において、排他性欲求の単純主効果が有意であり、欲求強群 ( $M=3.27$ ) の方が欲求弱群 ( $M=2.87$ ) より得点が高く、上下関係があると認知していた。また、排他性欲求×性の一次交互作用が有意であった ( $F(1, 162)=5.11, p<.05$ ) ので、下位検定を行ったところ、女子において、排他性欲求の単純主効果が有意であり、欲求強群 ( $M=3.98$ ) の方が欲求弱群 ( $M=2.55$ ) より得点が高く、上下関係があると認知していた。

なお、性の主効果も有意であり ( $F(1, 162)=7.52, p<.01$ )、女子 ( $M=3.81$ ) の方が男子 ( $M=3.39$ ) より得点が高く、上下関係があると認知していた。

第4因子では、排他性規範の主効果が有意であり ( $F(1, 162)=20.96, p<.001$ )、規範強群 ( $M=3.69$ ) の方が規範弱群 ( $M=3.09$ ) より得点が高かった。また、排他性欲求の主効果が有意であり ( $F(1, 162)=4.09, p<.05$ )、欲求強群 ( $M=3.53$ ) の方が欲求弱群 ( $M=3.25$ ) より得点が高かった。さらに、性の主効果も有意であり、( $F(1, 162)=5.19, p<.05$ )、女子 ( $M=3.52$ ) の方が男子 ( $M=3.18$ ) より得点が高かった。この結果は、仮説4を支持しており、排他性規範が強い集

団は、弱い集団より、いじめが起こっても、いじめが発見できないことを教師が認知していることが示された。

なお、排他性欲求×性の一次交互作用も有意であった ( $F(1, 162)=7.48, p<.01$ ) ので、下位検定を行ったところ、女子において、排他性欲求の単純主効果が有意であり、欲求強群 ( $M=3.83$ ) の方が欲求弱群 ( $M=3.17$ ) より得点が高かった。

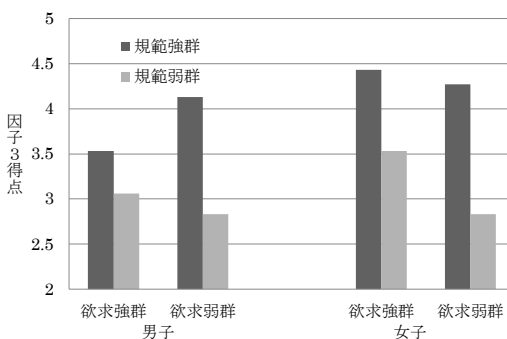


Figure 5 排他性が成員の上下関係 (因子3) に及ぼす影響 (実験1)

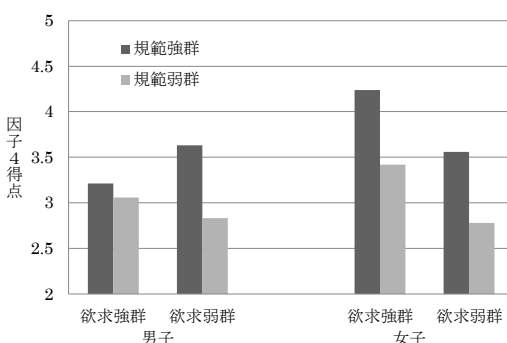


Figure 6 排他性がいじめのネガティブ反応 (因子4) に及ぼす影響 (実験1)

## 実験2

### 【方法】

#### 調査対象者と調査時期

鹿兒島県内の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教師207名を対象とした。性別は、男性73名 (35.3%)、女性134名 (64.7%) であった。年齢別では、男性教員は20代6名、30代48名、40代9名、50代以上10名であり、女性教員は、20代27名、30代55名、40代34名、50代以上18

名であった。校種別では、男性教員は、小学校27名、中学校24名、高等学校22名であり、女性教員は、小学校56名、中学校47名、高等学校21名、特別支援学校6名、無記4名であった。実験1と同一のシナリオを用いているので、女性教員のデータは実験1と一部重複している。なお、調査時期は、2008年8月～2009年3月であった。

### 実験計画

排他性欲求（強・弱）×排他性規範（強・弱）によって四つのシナリオを作成し、性別を要因に加えた3要因計画（いずれも被験者間要因）で実施した。

### シナリオ

実験1と同じであるが、シナリオの冒頭に、「以下の文章は、中学生の女子グループについてです。」と記した。

### 従属変数

実験1と同様に、フェイスシートで、年齢、性別、教師経験年数（臨時採用経験年数も含む）、学校種（小学校・中学校・高等学校・特別支援学校）を尋ねた。

質問項目は、実験1と同じであった。

### 手続き

調査対象者は、ランダムに配布された4種類の冊子のうちのひとつをとり、その中に書かれているシナリオを読んで、回答してもらった。回答に際しては、学級適応感、自集団適応感については登場人物の立場に立って回答を求め、いじめなどの認知については、客観的な立場に立って回答するよう求めた。なお、調査に際しては、公開講座で一斉に実施した他、各学校の知人に依頼して、実施してもらった。

## 【結果】

### 実験操作の有効性

シナリオで用いた排他性規範および排他性欲求の操作が有効であったかどうかを検討するために、操作チェック項目各3項目をそれぞれ加算し、排他性規範（強・弱）×排他性欲求（強・弱）×調査対象者の性（男・女）の3要因分散分析を行った。

まず、排他性規範に関する操作チェック項目であるが、排他性規範の主効果が有意であり（ $F(1, 198) = 382.32, p < .001$ ）、排他性規範強群が規範弱群より排他性規範を強いと評価していた。しかし、同項目に関して、排他性欲求の主効果

Table 2 各尺度の平均と標準偏差（実験2）

排他性規範	強群				弱群			
	強群		弱群		強群		弱群	
排他性欲求	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
性別								
<i>N</i>	15	30	23	35	19	42	16	26
学級適応感	2.68 (0.47)	2.78 (0.58)	3.09 (0.59)	3.46 (0.51)	3.17 (0.56)	3.04 (0.76)	4.08 (0.53)	4.07 (0.63)
自集団適応感	3.90 (0.51)	3.76 (0.63)	3.34 (0.63)	3.54 (0.69)	3.92 (0.37)	3.87 (0.58)	4.26 (0.54)	4.08 (0.67)
因子1	3.77 (0.39)	4.36 (0.51)	4.01 (0.71)	4.05 (0.68)	3.25 (0.86)	3.24 (0.72)	2.57 (0.70)	2.81 (0.91)
因子2	2.93 (0.79)	2.39 (0.57)	2.22 (0.56)	2.19 (0.54)	2.97 (0.88)	2.99 (0.66)	3.65 (0.69)	3.12 (0.96)
因子3	4.10 (0.69)	4.47 (0.46)	4.17 (0.76)	4.30 (0.69)	3.50 (0.81)	3.49 (0.89)	2.88 (0.67)	2.89 (1.05)
因子4	3.75 (0.84)	4.13 (0.61)	3.65 (0.81)	3.57 (0.97)	3.42 (0.82)	3.36 (0.85)	2.88 (0.76)	2.77 (0.91)

Note. *N*は人数（ ）内は標準偏差である。

( $F(1, 198)=7.81, p<.01$ ) が有意であり、排他性欲求強群が欲求弱群より排他性規範を強いと評価していた。

次に、排他性欲求に関する操作チェック項目であるが、排他性欲求の主効果が有意であり ( $F(1, 198)=321.24, p<.001$ )、排他性欲求強群が欲求弱群より排他性欲求を強いと評価していた。しかし、こちらも同項目に関して、排他性規範の主効果 ( $F(1, 198)=33.77, p<.001$ ) が有意であり、排他性規範強群の方が、規範弱群より排他性欲求を強いと評価していた。

実験2においても、実験操作の独立性を十分に保証できないという問題が明らかになった。しかし、それぞれの実験操作によって生じた分散比が最も大きかったことから、ある程度実験操作が有効であったと見なし、以下の分析を行うこととした。

また、想像のしやすさについて、評価してもらったところ、排他性規範の主効果 ( $F(1, 198)=10.77, p<.001$ )、排他性欲求の主効果 ( $F(1, 198)=11.53, p<.001$ ) がそれぞれ有意であり、排他性規範強群 ( $M=4.08$ ) が規範弱群 ( $M=3.70$ ) より、排他性欲求強群 ( $M=4.07$ ) が欲求弱群 ( $M=3.70$ ) より、想像しやすかったと回答していた。調査対象者の性は主効果傾向にとどまった。想像のしやすさに差が見られたことは、以下の結果を解釈するときには慎重になる必要があると言えよう。

#### 学級適応感

排他性規範×排他性欲求×調査対象者の性の3要因分散分析を行った (Figure 7)。その結果、排他性規範の主効果が有意であり ( $F(1, 198)=41.59, p<.001$ )、排他性規範強群 ( $M=3.06$ ) が規範弱群 ( $M=3.48$ ) より学級適応感を低く評価しており、仮説1を支持していた。また、排他性欲求の主効果が有意であり ( $F(1, 198)=68.74, p<.001$ )、排他性欲求強群 ( $M=2.94$ ) が欲求弱群 ( $M=3.63$ ) より学級適応感を低く評価しており、仮説2を支持していた。なお、排他性規範×排他性欲求の一次交互作用が有意であった ( $F(1, 198)=5.62, p<.05$ ) ことから、下位検定を実施したところ、排他性規範強群において、排他性欲求の単純主効果が有意であり、欲求強群 ( $M=$

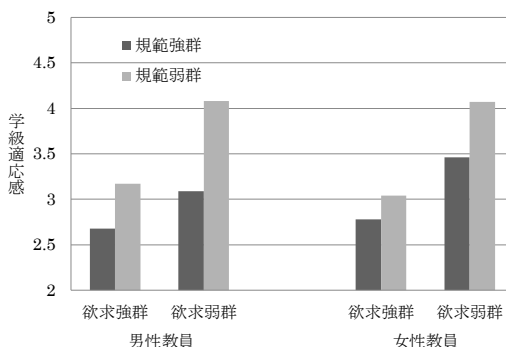


Figure 7 排他性が学級適応感に及ぼす影響 (実験2)

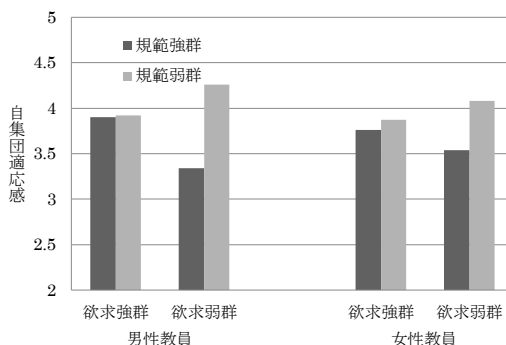


Figure 8 排他性が自集団適応感に及ぼす影響 (実験2)

2.73) の方が欲求弱群 ( $M=3.27$ ) よりも学級適応感が低かった。また、排他性規範弱群においても、排他性欲求の単純主効果が有意であり、欲求強群 ( $M=3.10$ ) の方が欲求弱群 ( $M=4.08$ ) よりも学級適応感が低かった。

#### 自集団適応感

同様に、排他性規範×排他性欲求×調査対象者の性の3要因分散分析を行った (Figure 8)。その結果、排他性規範×排他性欲求の一次交互作用が有意であった ( $F(1, 196)=13.36, p<.001$ ) ことから、下位検定を実施したところ、排他性規範強群において、排他性欲求の単純主効果が有意であり、欲求弱群 ( $M=3.44$ ) の方が欲求強群 ( $M=3.83$ ) よりも自集団適応感が低かった。この結果は、仮説3を支持するものであった。また、排他性規範弱群においても、排他性欲求の単純主効果が有意であり、こちらは逆に、欲求弱群 ( $M=4.17$ ) の方が欲求強群 ( $M=3.89$ ) よりも自集団適応感が高かった。

なお、排他性規範の主効果も有意であり ( $F$



(1, 196)=18.63,  $p<.001$ ), 排他性規範強群 ( $M=3.61$ ) が規範弱群 ( $M=3.99$ ) より自集団適応感を低く評価していた。

### 集団内地位やいじめなどに対する認知

因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行い，実験1と同じ4因子を抽出した（抽出後の分散説明率65.51%）。第1因子「いじめの起こりやすさ」の内的整合性は， $\alpha=.93$ ，第2因子「集団の付き合いやすさ」の内的整合性は， $\alpha=.72$ ，第3因子「成員の上下関係」の内的整合性は， $\alpha=.86$ ，第4因子「いじめへのネガティブ反応」の内的整合性は， $\alpha=.64$ であった。

次に，因子ごとに加算得点を算出し，排他性規範×排他性欲求×性の3要因分散分析を行った（Figure 9～Figure 12）。

第1因子では，排他性規範の主効果が有意であり（ $F(1, 194)=98.98$ ,  $p<.001$ ），規範強群 ( $M=4.09$ ) の方が規範弱群 ( $M=2.72$ ) より得点が高かった。また，排他性欲求の主効果が有意であり

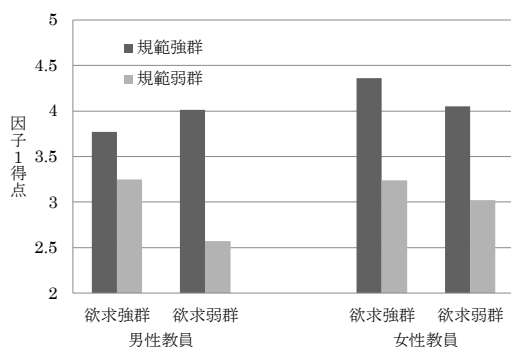


Figure 9 排他性がいじめの起こりやすさ（因子1）に及ぼす影響（実験2）

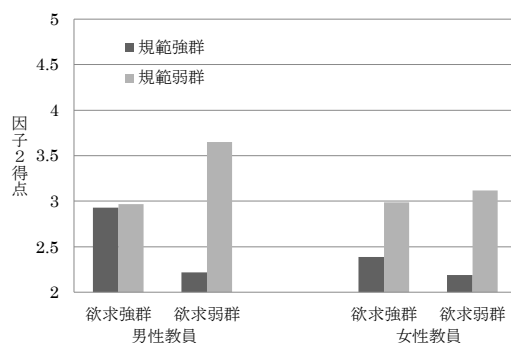


Figure 10 排他性が集団の付き合いやすさ（因子2）に及ぼす影響（実験2）

（ $F(1, 194)=7.42$ ,  $p<.01$ ），欲求強群 ( $M=3.63$ ) の方が欲求弱群 ( $M=3.46$ ) より得点が高かった。さらに，性の主効果も有意であり（ $F(1, 194)=3.96$ ,  $p<.05$ ），女性教員 ( $M=3.62$ ) の方が男性教員 ( $M=3.43$ ) より得点が高かった。

この結果は，仮説4，6を支持しており，排他性規範が強い女子の仲間集団は，規範の弱い仲間集団より，いじめが起こりやすく，反対意見を言いにくい雰囲気であると教師が推測していることが明らかになった。また，女性教員の方が男性教員よりも女子の仲間集団においていじめが起こりやすく，反対意見が言いにくい雰囲気であると推測していることも明らかとなった。

なお，排他性規範×排他性欲求の一次交互作用が有意であった（ $F(1, 194)=5.53$ ,  $p<.05$ ）ので，下位検定を行ったところ，排他性規範弱群において，排他性欲求の単純主効果が有意であり，欲求強群 ( $M=3.24$ ) の方が欲求弱群 ( $M=2.69$ ) より得点が高かった。排他性規範の弱い女子の仲間集団においては，排他性欲求の強い生徒がいることでいじめが起こりやすいと教師が推測していることが窺えよう。

第2因子では，排他性規範×排他性欲求×調査対象者の性の二次交互作用が有意であった（ $F(1, 197)=6.34$ ,  $p<.05$ ）ので，下位検定を行ったところ，男性教員において，排他性規範×排他性欲求の単純交互作用が有意であった。排他性規範強群において，排他性欲求強群 ( $M=2.93$ ) の方が欲求弱群 ( $M=2.22$ ) よりも得点が高く，逆に，排他性規範弱群においては，排他性欲求弱群 ( $M=3.65$ ) の方が欲求強群 ( $M=2.97$ ) よりも得点が高かった。それぞれ，規範と欲求の一致している群において，付き合いやすさが高いと男性教員は評価していた。なお，排他性規範×排他性欲求の一次交互作用も有意であった（ $F(1, 197)=16.19$ ,  $p<.001$ ）。

このほか，排他性規範の主効果（ $F(1, 197)=49.45$ ,  $p<.001$ ），性の主効果（ $F(1, 197)=6.34$ ,  $p<.05$ ）がそれぞれ有意であり，規範弱群 ( $M=3.12$ ) より規範強群 ( $M=2.36$ ) の方が，男性教員 ( $M=2.87$ ) より女性教員 ( $M=2.67$ ) の方が集団内のメンバーと付き合いにくいと考えていた。

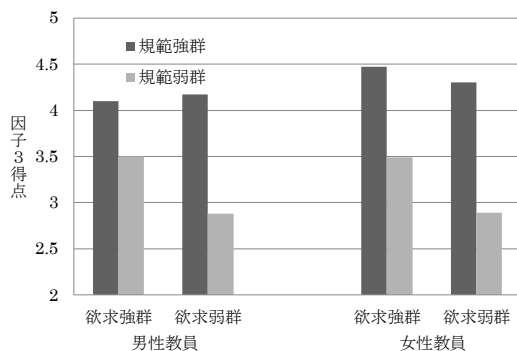


Figure 11 排他性が成員の上下関係(因子3)に及ぼす影響(実験2)

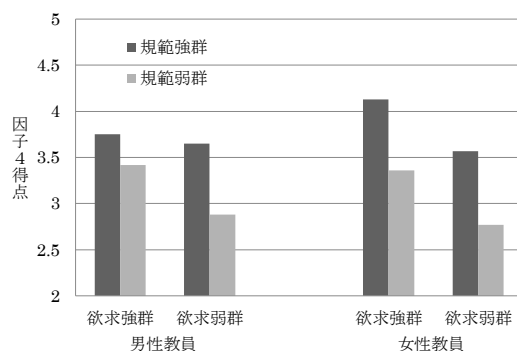


Figure 12 排他性がいじめのネガティブ反応(因子4)に及ぼす影響(実験2)

第3因子では、排他性規範の主効果が有意であり ( $F(1, 198)=83.45, p<.001$ ), 規範強群 ( $M=4.29$ ) の方が規範弱群 ( $M=3.24$ ) より、集団内に強力なリーダーが存在し、メンバーに上下関係が存在すると認知しており、仮説5を支持する結果であった。

また、排他性規範×排他性欲求の一次交互作用が有意であった ( $F(1, 198)=5.84, p<.05$ ) ので、下位検定を行ったところ、排他性規範弱群において、排他性欲求の単純主効果が有意であり、欲求強群 ( $M=3.49$ ) の方が欲求弱群 ( $M=2.88$ ) より得点が高く、上下関係があると認知していた。

このほか、排他性欲求の主効果が有意であり ( $F(1, 198)=7.42, p<.01$ ), 欲求強群 ( $M=3.85$ ) の方が欲求弱群 ( $M=3.68$ ) よりも得点が高かった。

第4因子では、排他性規範の主効果が有意であ

り ( $F(1, 197)=28.07, p<.001$ ), 規範強群 ( $M=3.78$ ) の方が規範弱群 ( $M=3.15$ ) より得点が高かった。この結果は、仮説4を支持しており、排他性規範が強い女子の仲間集団は、規範が弱い仲間集団より、いじめが起こっても、いじめが発見できないことを教師が認知していることが示された。また、排他性欲求の主効果が有意であり ( $F(1, 197)=12.53, p<.001$ ), 欲求強群 ( $M=3.64$ ) の方が欲求弱群 ( $M=3.27$ ) より得点が高かった。

### 【考察】

#### 本研究で得られた知見について

本研究では、教師を対象に、有倉(2012)と同様の架空場面を用いたシナリオ実験を行い、排他性規範および排他性欲求が、学級や登場人物の所属する仲間集団への適応感、いじめや集団内地位などに関する評価に及ぼす影響を検討した。その際、二つの実験を行い、実験1では教師の性別と同じ仲間集団を想定させて検討を行い、実験2では女子の仲間集団を想定させ、教師の性別による違いを検討した。

その結果、実験1, 2ともに、排他性規範や排他性欲求の強さは、学級適応感を低めており、生徒を対象にした有倉(2012)と同様の結果を得た。教師からみても、排他的な行動規範の強い仲間集団に所属している生徒は、そうでない仲間集団に所属している生徒よりも、また、排他的な欲求の強い生徒は、弱い生徒よりも、学級適応感を低いと評価していた。この結果は、実験的な手法を用いているが、教師からしてみれば、学級適応感が低いから、排他的な行動規範の強い仲間集団ができ、また、排他的な欲求が強まるのだとみているとも解釈できよう。

生徒を対象にした有倉(2012)との比較をみると、教師を対象とした二つの実験の結果はほとんど同じである。異なることといえば、生徒では、男子の方が女子よりも学級適応感が高いと評価していたことである。仲間集団を想起させて登場人物の学級適応感を推測させる場合、生徒からしてみれば、女子の方が男子より仲間集団の存在によってストレスを感じているが、教師は仲間集団の存在による影響は男女で違いがないと考えてい

ると示唆されよう。

自集団適応感については、実験1では、排他性規範の強い仲間集団に所属している場合、排他性欲求の弱い生徒は、排他性欲求の強い生徒よりも自集団適応感が低いという仮説3を支持せず、排他性規範の弱い集団に属している場合に、排他性欲求の強い生徒は、弱い生徒よりも自集団適応感が低いという結果が新たに得られた。生徒を対象にした有倉（2012）と実験1のFigure 2を比べてみると、中学生は排他性規範が強かつ排他性欲求が弱い場合にのみ、自集団への適応感が低くなると考えているのに対して、教師は、排他性規範が弱かつ排他性欲求が弱い場合以外は、自集団への適応感が低くなると考えているということが示唆される。また、実験2では、女子の仲間集団だけを対象にしているが、教師は、排他性規範と排他性欲求の不一致によって自集団への適応感が低くなると考えていること（Figure 8）が示唆されよう。これらの結果の違いは、同じシナリオ実験を行っていることを考えると、視点の違いではなく、生徒と教師の立場によって生じる違いと解釈することができよう。

集団内地位やいじめに対する認知に及ぼす影響については、実験1、2ともに、排他性規範が強い仲間集団の方が弱い仲間集団よりも、逸脱したメンバーに対する仲間はずれや無視、暴力といった制裁としてのいじめが起りやすく（仮説4）、強い権力をもったリーダーがおり（仮説5）、反対意見を言えない雰囲気があると評価していた。この点では、生徒を対象にした有倉（2012）と同様の知見が得られていると言える。加えて、排他性欲求の強い生徒が集団にいる方が、弱い生徒がいる集団よりもいじめが起りやすく、強い権力をもったリーダーがおり、反対意見を言えない雰囲気があると評価していた。この結果も生徒の知見と同様であり、操作の有効性の問題とも関係してくるが、排他性欲求の強い生徒がいること自体が、仲間集団内で排他的な行動規範を強める一因となると考えられるので、このような結果が得られたのだと言えよう。

生徒を対象とした有倉（2012）と比較すると、実験1では性の主効果が得られていたことが異

なっていた。いずれも、女子の方が男子よりも、仲間集団そのものをいじめが起りやすく、強い権力をもったリーダーがおり、反対意見を言えない雰囲気があると考えている。ただし、この効果が想定した生徒の性別によるものか、教師自身の性別によるものなのかを分離することができないという問題が考えられる。そこで、実験2では女子の仲間集団に限定して検討を行った。その結果、女子の仲間集団において、女性教員の方が男性教員よりも、いじめが起りやすいなどの評価をしていた。これらの結果を合わせて考えると、少なからず教師の性別の違いは、仲間集団の評価に影響していると言えよう。女性教員は自らが中学生の頃も同様の仲間集団に所属していたと考えられると、女子の仲間集団内でいじめが起りやすいと考えてしまうのかもしれない。その点では、男性教員は、女性教員ほどには、女子の仲間集団をいじめが起りやすい集団とは見ていないとも言える。

#### 本研究の問題点と今後の課題

本研究も有倉（2012）と同様、架空場面を設定したシナリオを用いた実験を行ったが、排他性の二つの概念の独立性を保証できなかった。また、想起しやすさに実験操作の影響が見られたことも本研究の問題点であり、かつ興味深い知見であるとも解釈できよう。なぜならば、生徒を対象にした有倉（2012）では、性の主効果のみが見られ、女子の方が男子より想起しやすいという結果が得られていたが、教師を対象にした本研究では、実験1、実験2ともに排他性の操作の効果が見られた。加えて、本研究の実験1では排他性規範の高群においてのみ、性差が見られていたが、仲間集団を女子に限定した実験2では性差が有意な傾向にとどまった。これらの結果から、教師は、生徒以上に仲間集団が排他的であることに関心があったため、性の影響相対的なのが小さかったと見られる。

教師にとっては、いじめにもつながりかねない排他的な仲間集団の方が、関心のある問題としてとらえやすく、その結果、想起しやすさにつながったのかもしれない。

（本論文は、中野・有倉（2008, 2009）にて発表

された結果の一部を再検討したものである)

**【引用文献】**

- Jones, E. E., & Nisbett, R. E. (1972). The actor and the observer: Divergent perceptions of the causes of the behavior. In E. E. Jones, D. E. Kanouse, H. H. Kelley, R. E. Nisbett, S. Valins & B. Weiner (eds.), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. Morristown, NJ: General Learning Press. pp. 79-94.
- 森田洋司 (1985). 学級集団における「いじめ」の構造 ジュリスト, **836**, 29-35.
- 中野秀敏・有倉巳幸 (2008). 教師の視点から見た児童・生徒の友人関係における排他性 九州心理学会第69回大会発表論文集, P. 45.
- 中野秀敏・有倉巳幸 (2009). 教師の視点からみた女子生徒の友人関係における排他性 日本教育心理学会第51回総会発表論文集, P. 648.
- Ross, L. (1977). The false consensus effect: An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 279-301.
- 有倉巳幸 (2012). 中学生の仲間集団の排他性に関する研究 鹿児島大学教育学部研究紀要 (教育科学編), **63**, 29-41.